

五輪塔（航海記念塔）

五輪塔と呼ばれる大きな 5 段の石塔が、石清水八幡宮からそう遠くない男山山麓に建っています。高さは 6 メートルで、日本最大級の大きさです。この塔は国指定重要文化財となっています。

五輪塔は仏塔の一種であり、平安時代（794～1185 年）中期に日本で導入されました。それらはほとんどの場合、石造りであり、形は宇宙を構成すると信じられている 5 つの要素を象徴しています。下から上に、立方体、球、ピラミッド、半球、そして宝石の形となっており、それぞれ地、水、火、風、そして天空（または空）を表しています。このような塔の中でより小さいサイズのものは、墓標や記念塔となっているものが多く、仏教寺院や墓地でよく見られます。

この五輪塔は鎌倉時代（1185～1333）に建てられました。ほとんどの五輪塔とは異なり、刻銘がないため、制作の目的は不明です。最も知られている言い伝えによると、1175 年頃、ある商人が中国から帰国する途中、海上で激しい嵐に巻き込まれました。命の危険を感じた彼は、八幡神に身を守ってもらえるよう祈り、奇跡的に岸までたどり着くことができました。彼は祈りに応えてくれた神様に感謝して、大きな石塔を建立しました。この話にもとづき、この塔はときどき航海記念塔とも呼ばれます。その他にも伝説があり、五輪塔は石清水八幡宮の創始者である行基の墓の印となっているとか、武士たちの霊を祀ったものであるとか、亡くなった家族のために忌明けの祈禱を行う巡礼地としての役割を果たしている、ともいわれています。